BOOK X — 見えざる戦争

第01章 — 見えない男

01 — 名前のない朝

ロイは、壁の向こうに誰かが立っているような気がして目を覚ました。何の音で目が覚めたのかを確かめるまで、目を閉じたままでいた。屋根の端から落ちる水が、金属製のシャッターに当たっていた。そこには誰もいなかった。

眠っている間に、舗道に差し込む光の位置が変わっていた。どれほど眠っていたのかは分からなかった。腕時計は九時を数分過ぎた時刻を示していた。

右手を裏返した。握ろうとすると、二本の指が動いた。残りの指は少し遅れて動いた。眠る前からこれほどはっきりとした遅れがあったのか、思い出せなかった。

イマニにその意味を尋ねたかった。

クリーニング店の男がくれた水のボトルが、脚のそばに転がっていた。少し飲んでから、コートの中に戻した。シャツの下の傷当ては、乾いた部分が硬くなっていた。交換できるものが何もない場所で、それを剥がすのはやめておこうと思った。

建物の端の開口部から道路が見えた。向かいの作業場にトラックが物資を届けていた。二人の男が荷物を受け取り、箱に付けられた印を、一人が手にしている一覧表と照合していた。異常な夜の翌朝に行われている、ごくありふれた作業に見えた。

ロイはトラックが去るのを待ってから、立ち上がろうとした。

かつては、地面から身体を起こすのに、その動作について考える必要などなかった。今は、左手をどこに置くか決めなければならない。不愉快な学習だった。何気ない一つ一つの動作が、いくつもの別々の工程に分かれ、そのどれもが失敗し得るものになっていた。

立ち上がると、数秒間、壁に背を預けた。脚は体重を支えてくれた。

出入口の近くで一枚の紙を見つけた。その敷地の再開発に関する告知だった。末尾に記された企業名に覚えはなかった。完成予定日は二年近く前に過ぎていた。誰もその告知を取り外していなかった。

建物の外では、何者かが古い番号の上に新しい番号をペンキで書いていた。塗料の縁から、古い番号がまだ見えていた。

目覚めてから今まで、自分に与えられてきたさまざまな呼び方を思い出した。医療記録に記入されたものもあれば、一度も入ったことのない部屋で下された決定に付随するものもあった。最も新しいのは、昨夜公共スクリーンに表示されたものだった。

対象者は機密技術を保有している可能性がある。

疲れ果てて考える余裕もなかったときには、その文章がこれほど馬鹿げているようには思えなかった。今朝の時間の一部を、彼は自分の指を動かすことに費やしていた。都市のどこかでは、ある将校が、その指は国家が回収する権利を有する技術なのだと説明しているかもしれなかった。

電話を取り出した。バッテリーの残量は予想よりも少なかった。レイチェルの名前はまだそこにあり、彼女からは何も届いていなかった。

待ち合わせ場所を決めたのは、道路がどのように封鎖されるかを知る前のことだった。もし彼女がそこへたどり着けなかったなら、自分と同じように別の判断を下さなければならなかったはずだ。電話を眺めたところで、どちらの判断も取り消すことはできない。

電話をしまい、日の当たる場所へ足を踏み出した。

02 — 開かれた扉

ロイが最初に見つけたカフェでは、近隣の作業場から来た人々に朝食を出していた。上階の窓が合板で塞がれた建物の、一階の半分を占める店だった。入口近くのテーブルでは、一人の女性が小さな端末で朝のニュースを読んでいた。

ロイは道路の向かい側で足を止めた。軍用車両は見当たらなかった。しかし、それだけで店の中が安全だと分かるわけではなかった。

食事を買えるだけの金はあった。まだ、その金が使えるかどうかは確かめていなかった。

病院では、必要なものの多くを受け取る前に、本人確認を求められた。この店には小銭を握った人が入っていき、店主は、その人がどこから来たのかよりもコーヒーを飲むかどうかに関心があるようだった。

ロイは道路を渡った。

店主が茶と、野菜を添えたご飯の入った器を運んできた。ロイは食べ始める前に代金を支払った。負傷した手はテーブルの下に隠したままだった。食事の半ばまで来たとき、隣のテーブルの端末に速報が表示された。

ニュースを読んでいた女性が眼鏡をかけた。音量を上げた。

政府の報道官は、前日の規制が、機密物件に関わる作戦中の公共の安全を確保するためのものだったと説明していた。都市の大部分で交通機関が運行を再開したという。病院の患者については何も語らなかった。

やがて、画面の隅に一枚の写真が現れた。

ロイは視線を落とした。診断棟での出来事より前に撮影された写真だった。そこに写る自分は今より健康そうに見えた。どれだけの人が違いに気づき、どれだけの人が写真の男と自分が別人である証拠だと思うのだろうか。

「大臣を殺したんだろう？」と、別のテーブルから男が尋ねた。

「そのうちの一人がね」と女性が答えた。

「一人って、どういうことだ？」

彼女は端末を男の方へ寄せた。男が写真の下の告知を読もうとしているうちに、写真は消えた。

ロイは器に残ったものを食べ終えた。会話を聞かずにいるのは難しかった。死んだ大臣が新しい給水規制の責任者だったという声が聞こえた。別の誰かは、政府が何日も情報を隠していると言った。店主は、二つの話が何の関係もなく、どちらも真実であることだってあり得ると答えた。

ロイが立ち上がって店を出ようとすると、店主が彼の肩をちらりと見た。

「怪我をしたのかい？」

「ああ」

「次の通りに薬局がある。大きな店は閉まっているが、小さい方は開いているはずだ」

ロイは礼を言った。さらに質問されることを覚悟していたが、何も聞かれなかった。

出入口で、子供を連れた若い女性とすれ違った。子供は電車がまた動いているのか知りたがっていた。母親は駅に着けば分かると言った。

ロイは左手で扉を押さえ、二人を通した。子供は彼の顔を見上げなかった。

それは今朝、ロイが自分以外の誰かのためにできた、初めての役に立つことだった。

03 — 住所の変更

利用可能な宿泊施設の最初の一覧表が届いたとき、レイチェルはまだ地域協会にいた。記載されていたのは、そのほとんどが交通機関の運行を再開した地区の公共施設だった。そのうち一つの住所の横には、すでに満員であるという注意書きが手書きで加えられていた。

ボランティアの一人が、市営の宿泊施設に場所を手配しようと申し出た。その際、一枚の用紙を差し出した。

レイチェルは返事をする前に用紙を読んだ。夜中に到着したとき、協会は何の登録も求めなかった。宿泊施設では、恒久的な住所と本人確認書類、緊急宿泊を求める理由の申告が必要だった。

「住所がない場合はどうなるんですか？」

ボランティアは用紙の下部にある、選択すべき欄を示した。手続きについては、宿泊施設の職員が説明してくれるという。

レイチェルは用紙を返した。まずは別の方法を探してみると言った。

女性は詫びた。「あなたが行ける場所を用意するのが、私たちの役目なんです」

「もう用意していただきました。ありがとう」

レイチェルは夜のうちにいくらかの時間を使い、エイドリアンの資料一式に含まれる文書を見比べていた。テーブルの端でもう一度それを開いた。研究者たちが予想したよりも長く安定した状態を保った培養組織についての観察記録と、その最初の結果への期待を大きく後退させる、後日の観察記録があった。二枚の間には、装置の測定値が記された資料が挟まっていた。

彼女は二枚を並べた。二つ目の観察記録を抜き取って、最初の結果を発見と称することは、あまりにも簡単だっただろう。

古い文書は整理するのがもっと難しかった。病院の研究者たちのために書かれたものではなかった。ある記録の参照事項が、別の記録で異なる分類に記載されている一群の被験者に関連しているようだった。どちらの記録にも、その被験者を特定するために必要な情報はなかった。

レイチェルはその参照事項をノートに書き写した。欠けている情報を推測で補うつもりはなかった。

病院の一般向け電話番号にかけてみた。長いこと待った末に、職員が応答した。現在、研究棟は外部からの電話を受けられないという。レイチェルは、それが医療上の制限なのか、管理上の制限なのかを尋ねた。

「管理上のものだと思います。いつ解除されるのかは聞いていません」

「イマニ医師がそちらにいるか教えていただけますか？」

職員は名前を探し始めたが、やがて作戦中は職員の動向に関する情報を提供できないと言った。

レイチェルは礼を言って電話を切った。

エイドリアンについて尋ねればどうなるかは想像できた。それで彼が自由に話せるかどうかが分かるわけでも、彼女が連絡しようとしていることを彼が知っているかどうかが分かるわけでもなかった。

新しい紙を取り出し、夜の間に書き記した経緯に、病院の返答を加えた。重要なのは、記録について説明できる人々との連絡が難しくなっているという事実だった。その理由については、まだ確かめることができなかった。

正午には、協会の待合室は通常の用途に戻されることになっていた。すでに何人かの旅行者が立ち去っていた。

レイチェルは資料を閉じた。都市の反対側にいるロイのことを最後に思い描いたとき、そこに座っていたというだけの理由で、同じテーブルに留まっていても意味はなかった。

ボランティアは、別の訪問者が置いていった街路案内図を彼女に渡した。レイチェルはそれを折り畳んで鞄にしまった。用紙に記入できる新しい住所を得られないまま、外に出た。

04 — 発見されていない人物

デレン大尉は、朝の情勢評価が、前日の作戦に参加していなかったいくつもの機関にも配布されていたことを知った。新しい版には、現在の所在が確認されていない男についての項目があった。

その下に、文書を受け取った機関が取るべき措置の一覧があった。

ヴェイル大佐が不在の間に、その一覧を読んだ。病院に関わる指示について意見を述べるよう求められていたが、その指示だけを抜き出した文書はなかった。さらに大きな文書の中に組み込まれていた。

見慣れた措置もあった。それ以外には、通常なら行政職員が担う業務に関するものがあった。医療援助の要請が、医療援助の提供とは何の関係もない機関への通知につながるかもしれない。一人の乗客についての照会が、他の数人の乗客についての情報の配布を招くこともあり得た。

デレンは隣にいた中尉に、対象者の身元が確実に確認されなかった場合、どの規定の適用が終了するのかと尋ねた。

中尉は文書を調べた。その問いに答える規定は見つけられなかった。

「終了命令を待つことになると思います、大尉」

「作戦全体のか？」

「はい」

デレンは自分の報告書に戻った。対象者は負傷しており、治療を必要としていると記していた。病院が受けた損害の程度や、通常業務の中断についても記していた。公表された最新の情勢評価には、そのどちらも含まれていなかった。

ヴェイルが部屋に入ってくると、デレンは、当初の対象地区の外にある機関に送られる通知に医療情報も含まれるのかと尋ねた。

「対象者を識別するための資料は届いている」

「診療所に彼が現れたら、そこの職員はどう対処すればいいのか知っておく必要があります」

「診療所は関係当局に通知する必要がある」

「治療を行う前にですか？」

ヴェイルは室内の他の将校たちを見た。「我々は診療の指示書を作っているのではない、大尉」

「まさにそれが、私の懸念です」

大佐は答えなかった。報告書を医療連絡担当者に転送するよう求めると、新たに寄せられた目撃情報に目を向けた。

一つは、店にいた男に関するものだった。特徴はロイの写真と一致していたが、目撃者が追加情報を伝える前に男は立ち去っていた。もう一つは、別の地区で治療を拒否した患者に関するものだった。その患者は女性であることが判明した。

情報は次々と届いていた。しかし、司令部がロイについて確実に知っていることは、それに見合うほど増えてはいなかった。

デレンは、その朝早くに画面にあった空欄を思い出した。最後の記載が削除されて以来、その空欄には意味があった。読む者すべてに、自分たちが知っていることの限界を見せていたからだ。

改訂版の情勢評価では、その欄が地図に置き換えられていた。考えられる目撃情報がすべて地図上に示されていた。都市は情報で満ちているように見えた。

それでも、確認された所在は一つもなかった。

05 — 待合室の男

M-04が地域施設の待合室に座ってから、二時間近くが経過していた。医療職員がやって来て、再び彼の両手を診察した。容体が変化したために診察が求められたことを示すものはなかった。職員は、次の配備までに入力しておく必要のある一連の評価を済ませようとしていた。

彼は両手を差し出した。職員は、診断棟で負った小さな切り傷を覆っていたものを取り除いた。

「感覚に変化は？」

「ない」

彼女は一連の検査を始めた。最初のいくつかは、彼が何度も受けてきたものだった。最後の検査には覚えがなかった。指示があるまで一定の姿勢を維持するよう求め、それから別の装置に何かを記録した。

検査が終わると、彼女は切り傷に対する追加の治療は必要ないと告げた。

「次の任務が終わったら、ここに戻ることになるのか？」と彼は尋ねた。

「あなたへの指示次第です」

「これも任務の一部なのか？」

彼女は二つ目の装置を見た。「評価の一部です」

彼は、その違いについて説明を求めなかった。職員自身も、仕事を終えるために必要なこと以上には知らされていないようだった。

彼女が結果を端末に入力するのを見ていた。診察内容を記載するページには、彼女には変更できない項目がいくつかあった。その一つは、義務づけられた再評価の間隔に関するものだった。項目の配置には覚えがあった。それらの値がどの文書に基づいているのか、一度も見せられたことはなかった。

制服姿の将校がやって来て、男をすぐに任務へ就かせることができるかと職員に尋ねた。職員は可能だと答えた。

M-04は立ち上がった。彼が必要とされる可能性のある地区について説明を受けた。対象者の所在は確認されていなかった。現地に到着すれば追加の指示を受けられるということだった。

「彼の負傷について、評価は行われたのか？」と尋ねた。

将校は病院で作成された報告書を読んだと言った。対象者を回収できる状況に至るまで、M-04がその負傷を気にする理由はないという考えだった。

「前回の接触時には、かなりの機能障害が認められた」

「ならば、その情報はすでに持っているわけだ」

将校はM-04を扉のそばに待たせて、職員と話をした。会話の一部がM-04にも聞こえた。次回の診察日と、別の地域に再配属される前にそれを実施する必要があるかどうかについてだった。

職員は、必要に応じて見直せると言った。

その日が来たときも同じ地域にいるつもりなのか、誰も彼に尋ねなかった。普通、兵士にそのようなことを聞く理由はほとんどない。M-04は、見直すという言葉を使った人々が、自分の所在について述べていたのか、それとも所在とは何の関係もない何かについて述べていたのかと考えた。

将校が戻ってくると、M-04は彼に同行して部屋を出た。

06 — 包帯の値段

小さい方の薬局は開いていた。店主は一部の医薬品の供給が途絶えていることを知らせる紙を、窓に掲示していた。カウンターの奥には傷当ての箱と、プラスチック製のボトルが並んでいた。ロイが知っている名称はほとんどなかった。

カウンターに金を置いて、清潔な傷当てを求めた。

店主は負傷の程度を知りたがった。ロイはコートを脱がずに、傷の位置を説明した。

「医師の診察は受けましたか？」

「昨日」

「それなら、もう一度行った方がいいですよ」

「行けないんだ」

女性は彼を見た。一瞬、理由を聞かれると思った。だが彼女はカウンターの下から袋を取り出し、求めていた大きさの傷当てが入っていると告げた。

背後で誰かが薬局に入ってくると、ベルが鳴った。ロイは急に振り向きすぎた。肋骨の下に鋭い痛みが走り、カウンターに手をつかなければならなかった。

入ってきたのは処方箋を持った年配の男だった。ただ扉を開けただけなのに、ロイを驚かせたことを詫びた。

店主はロイと年配の男を交互に見た。ロイに少し待てるかと聞き、それから処方箋を受け取って対応した。

ロイは傷当てを買い次第、店を出るつもりだった。だが最初の数歩を踏み出すことさえできるか分からなくなり、その場に留まっていた。

年配の男が帰ると、女性は椅子を持ってきた。軽い怪我なら手当てできるが、彼の身に起きたらしいことに対処する資格は持っていないという。この時間なら通常、診療所を開いている医師がいると教えてくれた。

ロイはイマニが渡してくれた医療上の指示書を広げた。力になってくれる人が見つかるまでは、誰にも見せるつもりはなかった。女性は最初の部分を読んでから、彼に返した。

「これを理解できる人が必要ですね」

「分かっている」

代わりに連絡できる人はいるかと聞かれた。今のところ、いないと答えた。

彼女は普段、届いた荷物を開梱するために使っている店の奥の小部屋を貸すと言った。自分で交換できるなら、そこで傷当てを取り替えてよいとのことだった。助手が知らずに触ってしまうような場所に医療廃棄物を残さないでほしいと頼まれた。

ロイは礼を言った。

思っていたよりも時間がかかった。終わってからも、通りを見下ろす建物でレイチェルがしてくれたほど上手にできたとは思えなかった。最後に彼女が傷当てを交換してくれたとき、彼はどうすれば二人でいられると彼女を説得できるか、そのことばかり考えていた。彼女にとってその作業がどれほど難しいか、十分に気を配っていなかった。

カウンターに戻ると、店主は渡していた金を袋の横に置いていた。実際の値段は彼が置いた金額よりも安いのだと説明した。ロイは残りを受け取った。

彼女は次の通りまで歩けるかと尋ねた。

「ああ」と彼は答えた。

その答えが真実だと確信できるまで、彼は待った。

07 — 受け取られないメッセージ

レイチェルが専門職協会の建物に着いたのは、一時を少し過ぎた頃だった。以前、研究の将来について話し合った際にエイドリアンが挙げた機関の一覧から、その住所を見つけていた。医師と研究室の職員による組織だった。そこで働く人々の名前は知らなかった。

受付の職員は、研究室の業務が中断された場合の研究記録の保全について、助言を受けられる人と話がしたいというレイチェルの説明を聞いた。

「どちらの研究室ですか？」

レイチェルは病院の名前を告げた。

受付の職員は机の後ろにある扉へ目を向けた。午後遅くには協会の法務委員会の人が来る予定だという。その女性が科学的な記録について助言できるとは限らないが、業務の中断に対して何ができるかは分かるかもしれないとのことだった。

レイチェルは、関係する患者を特定することなく、一般的な問い合わせを残しておけるかと尋ねた。

「もちろんです。それでしたら患者さんのお名前は必要ありません」

受付の職員は一枚の普通の紙を渡した。レイチェルは数行の文章を書いた。研究の意義については何も主張しなかった。原本へのアクセスが制限されたとき、研究室の記録の存在とその日付を独立して証明する手段があるのかと尋ねた。

返信先を記入する欄の前で手が止まった。結局、返答を送ってもらう代わりに、受け取りに来ることは可能かと尋ねた。

「構わないと思います」と受付の職員は言った。「今日中には用意できないかもしれませんが」

レイチェルは資料を手元に残した。それを預けられる場所を探していたが、見つかったのは問題を検討してくれる人だけだった。今のところ、それにも意味はあった。

建物の外のベンチに座り、電話を開いた。ロイからのメッセージはなかった。二人が最後に交わしたやり取りはあまりにも日常的なもので、今それを見ることが辛かった。彼女が病院に何時頃着く予定かという話だった。

新しいメッセージを書き始めた。助けを得られそうな場所を見つけたと伝えたかった。何か食べることができたのかも聞きたかった。だがどちらを伝えるにしても、返事をすることが危険なときに彼がメッセージを受信してしまう可能性が生まれる。

書いた文章を読み返した。

そして画面から彼の名前を消し、何も保存しなかった。

彼女には、別の人生で経験した離別の記憶があった。その人生の終わり方は、その後知ったあらゆることと、今なお整合させることができないものだった。今回の離別は違っていた。ロイを最後に見た場所を知っている。彼がそこへたどり着くのを手伝ったのは自分だった。彼がそこで死んだという証拠はなかった。

同時に、彼が無事であるという証拠もなかった。

隣のベンチでは、男が電話で話していた。帰宅が予定より遅くなると誰かに伝えていた。話を終えると電話をポケットにしまい、立ち上がって去っていった。

レイチェルはもう少しの間、ベンチに座っていた。あの男のようなありふれた会話が、ある種の特権なのだと考えたことはなかった。

08 — 目立たない男

午後の早い時間になると、商業施設の周辺の通りには、作業場から出てきた人々が集まり始めた。いくつかの工場では最初の勤務時間帯が終わり、別の工場では午後から働く人たちを迎え入れていた。舗道には、二つの木箱から果物を売る男が立っていた。

ロイは疲れていた。食事をし、清潔な傷当てを手に入れ、目覚めたときに可能だと思っていたよりも遠くまで歩いた。だが日が暮れるまでに残された時間で、それらをもう一度成し遂げられるとは限らなかった。

たどり着いた通りからは、都市の中心部へ数通りの道が続いていた。遠くの端には交通ターミナルがあった。その入口の周囲に掲示された公共の告知が目に入るまでは、そこへ行こうと考えていた。

その中に自分の写真があった。

写真がある場所に留まり続ける一方で、そこに写る人物が別の場所に立っていられるというのは、不思議に思えた。写真の下を通る人々は、道路の反対側にいる男についてよりも、その写真について多くの情報を持っていた。写真にまったく目を向けない者もいた。

ロイは、シャッターの下りた店の脇にある低い塀のところで足を止めた。工具箱を持った男が、塀のもう一方の端に座った。バスを待っているのだった。しばらくすると男は、運行が再開したか知っているかとロイに聞いた。

「今日はまだ乗っていない」

男は七時から職場に行こうとしていたと言った。結局、代わりに兄弟のところへ工具一式を取りに行ったのだという。自宅に戻るか、再び職場に行こうとするか、決めかねていた。

ロイは話を聞いた。男の話には、大臣も病院も機密作戦も一度も出てこなかった。男はただ、その日に家を出てきた甲斐があるだけの金を稼ぎたかったのだ。ロイにはその気持ちが分かった。

道路の向こうでは、二人の制服姿の職員が、ターミナルから一人の職員とともに出てきた。その職員が乗り場の一つを指差した。彼らは示された方へ歩いていった。

姿が見えなくなるまでロイは彼らを見ていた。なぜそこにいるのかは分からなかった。政府が取る措置の一つ一つに自分との関係を見いだそうとする傾向を、抑えなければならなかった。

遠くにバスが現れると、隣の男は立ち上がった。工具箱を持ち上げ、ロイに良い午後をと挨拶した。

ロイも挨拶を返した。

男が去って数秒の間、隣は空いていた。やがて別の人がそこに座った。女性が水のボトルを開け、電話で何かを読み始めた。

この人々の名前が記録される場所には入れないまま、彼らの中で生きることは何を意味するのかとロイは考えた。ある機関から見えない存在になったとしても、その機関の手が届く範囲で暮らす人々から食事や居場所、援助を得る必要はなくならない。所在を突き止めにくい存在になったことで、自分が都市の外に出たわけではなかった。ただ、この都市で暮らすために使ってきたいくつもの手段を失っただけだった。

ターミナルの入口にあった告知が、別の市当局の告知に差し替えられた。新しいものは交通に関する告知だった。

彼は塀から立ち上がった。

レイチェルを捜せるようになるまで留まっていられる場所が、この都市にあるかどうかは分からなかった。ただ、自分を回収するために送り込まれた者たちと、再び対峙できる状態ではないことは分かっていた。

作業場の先にある古い建物の方へ歩き始めた。そちら側の道路には日陰の舗道があり、必要ならまた足を止めることができる。

背後ではターミナルが乗客を受け入れ続けていた。都市のどこかでは、彼を捜す人々が、作業を続けるための報告を待っていた。

その日の午後、彼の隣に座った人々のうち、名前を尋ねた者は一人もいなかった。

第01章 終。